

# 李玉善さんが起こした「小さな風」

梶村道子 (ベルリン・女の会)

## 日本軍性奴隷制への高まる関心

河野談話検証から朝日新聞の自社記事検証へ、政府・右派マスメディアの朝日パッシングと、大手リベラル紙の自粛論調——。日本社会が、日本軍による性犯罪の記憶を抹殺しようとして動く中で、海外メディアが日本軍による性暴力を明確に〈性奴隷制〉と名指し始めています。日本政府が国連の場で〈性奴隷制〉を否定した結果、〈sexual slavery〉という表現が定着しつつあるのです。日本政府とマスメディアによる史実否定は、国外では通用しないどころか逆効果のようです。

ベルリンの日本軍「慰安婦」メモリアル・デーでも、この内外落差は際立ちました。この夏、私たちはスタンディング・デモの他に〈ナムムの家〉の李玉善さんの証言を聴く集まりを持ちましたが、8月14日のスタンディング・デモでは、ドイツ駐在の日本メディアが無関心を決め込むなか、ドイツ、韓国、中国等の報道関係者が李さんを熱心に取材してくれました。しかし何よりも励まされたのが、通りかかる人々の間で日本軍性奴隷制を周知する人が、ドイツ人と否とを問わず以前より目立ったことです。ブランデンブルク門を訪れる世界各地からの人々がこの問題に寄せる関心は高く、用意した英・独語の解説400枚はデモ終了を待たずに完配しました。世界の中で日本の市民だけが歴史の真実から目を反らされてしまっている、そのことを強く感じた2時間でした。



8月14日のスタンディング・デモ。ブランデンブルク門の前で李玉善さんを囲んで。  
(※写真は、いずれも梶村太郎撮影)

## 在ドイツ日本大使の冷たい仕打ち

さて今回、李玉善さんは、一晩かけても語りきれない自分の歴史をぜひ聴いて欲しいと、〈コリア連合〉を介して在ドイツ日本大使に面談を申し入れています。その李さんを大使館は徹頭徹尾、拒否したのです。大使館が車椅子使用者の李さんにまず示した条件が「単独の来館」、そして「言語は英語かドイツ語」との制限。「李さんは日本語が話せる」と伝え、数日後、外務省本省の返事だとの但し書きを添えて、

概要以下の回答がありました。「李さんがこちら(大使館)側の日本語を完璧に理解できるとは思えない」、「〈コリア連合〉による通訳も事実を曲解されかねないから認められない」と。これが慰安所で生き延びるために日本語を覚えた李さんへの、露骨に侮蔑的な日本の回答です。

もっとも〈日本政府の日本語〉は、国際社会においてはそもそも理解されていません。日本軍性奴隷制の犯罪と、その未解決がもたらす現在の人権侵害に関して大きく隔たった内外の認識——。それを直視するどころか、単に言語の問題として李さんを門前払いすることで、外務省は、李さんのみならず全被害女性をまたしても深く傷つけたのです。



在ドイツ日本大使の面会拒否に抗議する大使館前デモには急遽30人が集まった。李玉善さん(中央)は「車椅子であるの門の中に突入したい」と無念さをにじませた。

## 新しい、「小さな風」

ベルリンでは、3.11 フクシマ以降、日本の政治がおかしいと感じ、考え、動きだした日本人が、日本軍性奴隷制への政府の姿勢も変だと気づき始めています。8月16日にはそうした人たち40人余が集まって、李玉善さんの証言を聞きました。「被害を受けた自分だからこそ、日本の市民に語らなければいけない、すでに亡くなった女性たちのためにも話さなければ。だから今日ここに来た」と李さんは語りかけました。この問題を気にかけてながら、これまで関わるきっかけが掴めなかったという若い参加者は、「慰安婦」問題から受けていた負の印象を、李さんの話を聞くことで払拭できた」と言います。日本人として恥ずかしく、同性として辛いと率直に感じたある女性は、では何が出来るかと考えています。

「李玉善という女性が慰安所にいたというだけで終わりにしないで」、「日本が解決しなければいけないことがある。だから皆さんの力を貸して」という李さんに背中を押されて歩き出そうとしている人たち。小さな風が吹き始めているのかもしれない。



証言する李玉善さん